- ジア・ナロドニキ覚書 -

シャン

1. 殉教、受難 (古義) Passion

2. The Passionーキリストの受難

5. 病気 (古義)

5. 恋愛

6. 渇望の対象物

- ハリヤーエフと革命

愛なくば 水の底の椿

塚本邦雄

段 とし ス 1 T IJ P のテロ " チ ナ 0 П IJ 1 1 ズ F. V ムを採 ニキの ポフ将軍狙撃を契機として、革命手 用 人 々は、 するに至っ 一八 八七八年ヴ た。 そしてそれ ラ

小田光雄

環を有 テ さ フ ちに成り立ってい 1 れる やカ 角 ロリスト自身の、実践者自身の内的精神ド の云うような政治力学 か から捉え 0 し、テ IJ であるが の意志」党を経 ロリストの行為と存在は如何なる関 た場合、<テロル>の回路とは如何 エフ(注1)の社会革命 た 、との<テロル>の行為とは、 のであろうか (注2)の問題からでは て 党戦 初 のサ ラマ へと継続 なる円 と云 なく V 係 1 = のう 1 コ

てとう書いている。橋川文三は例によって鋭利を分析でテロリズムについ

- 6 -

表現に ずで く結び 0 A 一つとい テロ そ n ある。人間と 200 やす かりたてられる場合に、 00 IJ ズ た行動 5 2 0 VC てよい。そして、 領域の一つが 根源的 動であ いり恐るべき生物が、絶対的源的にねざした行動とさえい 人間 5 存在 か宗教であ 一般的に のもっと奥深 人間 しばしば選択す が絶対 5 b えば、 5 0 の意識 人 0 る手段 な自 充 間 ٤ がたと るは 0 45 ろ 己 生

する であろう≫ て、自殺と相表裏するも あろう。そしてまた、それが リズムの文化形態ということを言っ 同 であるとするなら、テ なら、その両者の様式を規定するも 時に相渉る行 動様式の一つとみることもで ロリ のであることが認めら 人間行動の極限形 ズムは、その二つの領域 ても のとし か 重 て、テ れると 態とし きる わ な 5 で

(『昭和超国家主義の諸相(注る)』)

カン プ 工 ととだろ は何とわた らで らし ニァ ロテ とれ L V 難 は鋭 あ 5 5 クは「テロリスト 1 。 なぜなら らっそ る」と云っているが、これこそ無意識的な 偉大さの典型を一つに結び シズムに置き換 ムへの傾斜 しが 5 が先述したエロティシで指摘である。だが橋川の n は それ 20 を意味し 文中 は殉教者と英雄、との二つの人 は、美しく、恐しくその魅力は えてみれば明確であろう。 T 0 はいないだろうか テ D あわせたものであ リズムと云う言葉を ズムと相似して 0 云うテロリ ズムと ステ エロる いる

0 終結は死が表出した時、 V 5 エフの場合、相手の死でもあり、自己の死 の彼方に現存するのは死である。人 にあっ ては、 初めて完成され テロ V とは相手の る。そ テロル V

ル>を行うのである。

(債うと云う関係が成立し、彼はかかる均衡の上に<テロあって、テロリストたる自己の死によって、相手の死を死=自己の死と云う方程式の上に打ち立てられたもので

は殺・ 殺さ 者達 るものは自らの死である。自らの死は暗殺を行う叛逆 ≪不正と抑 人犯にれれば の行動の正当性の端的な証明である。殺した者は になる。 圧 の権化である大公の死 L 殺され ずに生きて VC 対 て彼 5 n ば、彼 から

な均衡の上に立って暗殺の美学が成立する≫生の原則と自らの死の原則、この二つの主題の美事

(埴谷雄高『暗殺の美学』)

が約束されるわけである≫
た同じく、殺人と自殺は同一のものであった。それゆた同じく、殺人と自殺は同一のものであった。それゆわれるわけであり、これら二つの犠牲から、ある価値が約束されるわけである≫

(カミュ『反抗的人間』)

だがことにひとつの隠された秘密がありはしないだろ

革命> を視 <テロル>の瞬間に向って成熟するのだ。 佇立することになる。つまりテロリストの意識は、 り離され、かかる対象への接近過程である<テロル>が 裡にあってのみ、 きているのだ。テロリスト自身は、<テロル>の行為の てい のではない。 T としても、 、テロリスト 上の愛 る た時、テ に云えば、<未来の地上の愛>や<革命>とは切 のは、現在、それはこの人 を志向している 処刑され 200 ャーエフは それらは そして彼がそれらの中で生きていると考え ロリスト の個的 実現の る。 Λ 自己の肉体を燃焼させるのであって、 テロ しかしとの< 存在 確かか 党であり、不可視 のだが、それ は確かに<未来の地上の愛> ために、またカミ >を行う。そし の内側から< に<革命>のために、<未来 ハテロル> テロ らの中で生きて ル ハテロル なのだ彼が生き Vの過程に て大公は死 ュの云う の中にとそ生 ンの回路 この いる ある やへ お 5

未来の地上の愛>や<革命>から、殺される民衆の迫害 へと移行する。いや迫害者は同じ位置にまで持ち上げら 害者は、かかる象徴としてテロリストの裡で愛される 瞬間にあって、夢想の未来と交感し、憎むべき民衆の て<テロル>の過程にあって、志向する対象は< しれない。かくしてテロリストは、<テロル>

> 続性の回復と云うエロ 没し、そ ある。自己を否定することによって、対象(行為)に埋 なく、 れるものは、決して<未来の地上の愛>や<革命>で テロリスト自身にとって、 眩暈と錯乱に満ちたエロテ して死によってもたらされる失われた存在の連 テ ィシズムの世界なのである。 <テロル>の瞬間に啓示さ 1 シズム の世界なの で

存在は、犠牲として捧げられなければならない。まさに 地上の愛>と<革命>のために、テロリストと迫害者 そしてエロティシズムを実現させた対象たる<未来 (注4) そのものとして。バタイ ユは書いて 0 0

- 8 -

死に生 生であるが、しかし犠牲においては同時に、死は生の 抜け道とを与えることである。それは死と混りあった △般 るしであり、 の併出をあたえること、生に死の重みと眩暈と に犠牲の行為とは、生と死とを一致させること 無限への抜け道なのである。

(『エロティ シズム』)

の場合には、ひとつの問題が提起される。 しかしとの<テロル>の過程にあって、 それは<愛> カリャー エフ

<愛Vを否定しうるかと云う問いなのである。の観念である。未来の<愛Vを実現するために、 現在 0

車を目 彼 爆弾を投げる態勢にあった。だが彼は思いがけず、セ ≪もはやためらうととなく、カリャーエフは斜めに v は爆弾を摑んだ手をおろして立ち去った。馬車はポ ゲイ大公のほかに大公夫人エリザヴェータとパーヴ ル大公の子供たち、 『イ劇場の車寄せについた。 1がけて 突進した。彼の手はすでに マリヤとドミトリの姿を認めた。 もちあげられ 馬

ベステ

V

たち!君た

ちはなに

かと

て来 力 た。わたしに近づくと言った。 IJ 1 エフはアレクサンド ロフスキー 公園 ^ やっ

「ぼくの行動は正しかったと思う。子供を殺すこと きるだろうか?……」≫

(サヴィ ン コ フ『テロリスト 群像』)

投げるととが出来なかった。 を馬車に の危 + 会革 ・エフは (険を犯しても、子供が同乗していたため爆弾を、向けて投げようとする。 しかしカリャーエフは ゼルゲイ大公の暗殺に参加し、自ら爆弾 、闘団の一員として、サヴィ ソコフの下で、

>と云う絶対の前にすがたをあらわした<愛>

ジレンマに悩みつつ、<愛Vを選択する。かかる背反すは許容されるのか、! る。し 写している。 は許容されるのか。カリャーエフは<愛>と<革命 愛>を実現するために、 カリャーエフは正義と云う名のもとに、<未来の地上 かし<革命>のために無垢の子供を殺害すること セルゲイ 大公を暗殺しようとす

さいの悪を矯正しようとする革命はやめたらい 日その日の悪を正してゆくん 生き方をしてるのか?それなら慈善でもやって、その 餓え死してゆくんだぜ。子供が餓え死するのを、 君たちはそれで一人前の人間なのかい?その場限りの の二人の小わっぱどもしか見なかったんだ。いったい ととぐら ちは見たことがあるのかい?俺は見たね。爆弾で死 かりに、ロシアの幾千の子供たちがこれから先何年も ないじゃないか?ヤネクがあの二人を殺さなかった そいつを持 ヤネクはそいつを見たことがなかったのさ。 ラ ヤネクが大公を殺すことをひき受けたの い、あの餓え死に較べれば、極楽往生だ。だ ち出すんだな。じ だね。現在や未 ゃ、なにも わ か いらとす 来のいっ っち 大公 君 40 da to

スャ 工 立ち上る。

なにか 2 ひそ 3 人間 き受 n かはっきり 0 5 IJ る + てしまう + かけた VC 専 だが なろ 制政治 専 エフ し 制政 5 現われてく 君 と努力し だw か 治 のきざし の話はと ١ を打倒 テ パ 君 V れ以上聞 が 0 T るとしたら、 するために、 僕は自 感ぜら いる 言 葉 0 0 いていられ に、結 れるん かげに 分を恥ずか 僕は殺 僕は正義を愛 んだ。それっ 局 は すと 暗殺 しく な 5 愛がばり とを 者 思 6 VC だ

限界

0 左

T 5

B わ。 ち

のがあるわ。

なら

破壊するにも、ひ

とつの

秩序が

あ

る

わ、

公の だわ。

4

C

P

餓え死する子供は一人

もなく ど、大 な時

すと

も早く来るだろうと思ったから

ちが

な

れ

って容易なことじゃな

かかわ

るけ

n

るべ 名を残すことに る。そして彼は 彼は<愛> な行為なのだ。その<愛>を捨象することによっ の行為 き未 P 来は決 それはあく を選択 エフ なるので 「心優しき殺害者」とし L は<愛>を いし、子供 て実現され得ないと考えるがゆえ まで<愛∨の実現の あ 3 たちを殺害す 信 C T S る。 っることを 彼 て、 た 0 歴史 80 Λ 0 テ て、来 K 拒 必 口 vi そ 否 N のす

-10 -

あろ 00 2 絶対がそれ ح こでカミュ それは さず て、 K 絶対 の云って おれ す 自身根源的 なわ XD. 5 求め という存在 次 5 に孕ん 3 れば他を殺さねばならず、 のような視 0 は、 の不条理性を根源 でいるところの △革 角 内である。 命 V E Z 背理で 的人間

君た ことが VC. 一同 ステ 5 は世界全体を掩りようになる自由 VC らが 15 を信じられれば、子供が二人ぐらい死 な顔 よって、専制政治か どのと 完全に 立ち上 ちは革 18 5 か 支 ح つきで天を見上げることができるのだとい できると確信し V さ 0 5 Ł 配者と偏見 信じてさえい る)信じてないのさ。 (激 命を信じて るため かあ 55 の権 しく) 限界な 利 る 2005 をさ、 た ٤ いらん ていれ ら解放 か な じろぐなん いれば、俺 を持 0 5 5 そら 解 2 3 んだ?君た 放されたロ 放され 5 ば、そしてそのときこそ だ。 んぞあるも 2 てない の権利 なんだよ。それ もし君 (P たち て、そ の大地を打ち建てる 本当の ・ネク を 5 V の犠牲と勝利 認 アを、 5 b は んだって、な たちが全面 6 を除い めて カン 自 神 つまり、 革命 を子供 本 いるん 分では h 終 9 2 のよ 5 て、 当は VC 7 的

して民衆 革命家と パだろ とは ので カリ 子供 ッ化し 与え 域 ク D そし E 2 てい よう Ł 7 0 あ 0 IJ か + (体験的) に握って放 8 ħ 0 ら<愛>を凝視 3 1 犠 T *エフの<愛 か は は、 とによ として は 0 7 5 カン Da 0 0 4 かる ざる 意識 パッ カン ス」の領域に存在する。しかし「パト か 1 -5 ヴ ح 5 5 擊 1 口 カ 的 って、 v 3 7 背 を の革 後 ic ゴ 4 0 ハ愛>とは ろか えない ス な意 りを ン ・ 理の のは 支えら ならば IJ ョンの対 ンとは 命家 + 問 0 を 底に、 志の陥 より完壁に 力 有 L 題へと続いている 5 エフや L た時 ラ \$ か 追 5 ح さなな のだ の始 り越 違反に た 7 象たる<革命> T ま 5 0 0 T ただそ 力 た 5 I す 工 T 5 そ 00 克 た プリ 5 が 木 る を 力 F 0 フの み見ら パ 0 0 3 n + 5 0 3 N \$ 0 ったこと だけを表象して であ 0 ならな して 80 # のだ 2 0 22. I 5 初心に還る 愛> ・エフの< は 一神 弁証 v 0 日 Ì 意識する 心 革命 5 3 な わけであるが、 3 か VC 0 n 民衆 の国 (注 過ぎな とは 法 運動に になる 5 VC か を完結 \$ 0 Λ を 2 目に視え の構築と 愛> た 5 7 愛>があ 工 0 0 0 は だ ス」の Λ) _ 0 ムピリ 敵 5 方向を で エネ ことろ っそ しょ 愛V を賦 いる へ転 3 あ T な る 5 IV 0

> П 章

(1) カ 大仏次 IJ カ 工 サ 3 7 > ツ л, 2 1 1 (郎『詩人 ・ブ 『反抗 I 1 I ンス フの 1 7 的 ヴェルガー 一 テロ 軌跡に関しては次 リ『アゼー |人間||『正義の人びと| リスト フ 『政治と犯罪』 群像 へのもの を 参 照

(2) T V 次のよ 1 \wedge ニン は わ 5 れはテ ĸ 一九〇一年 書いて 5 る。 マイ スクラ』にテロ T 放棄し N VC 0

はない る軍 の軍事 テ 要となろう、 P ては あろ われ П しは、活 を T らし、 的 からも ならぬ作戦の 保ち闘争 し、今後も な作戦様式であ 用 動中のグル 50 完全に孤立 しか また の全般的 ,ロの原則 或る戦 文 し問題は次の点にある。 放棄しないだ 一つとしてではなく、 ている点だ 1 プが軍 闘時期 5 を決し プランに従 した、個人的 有効に使わ かにはどう 3 隊の主力と緊密 うら。テロ いって遂行 な攻撃手 L n た 0 は 5 T 3 ع ーつ 幸 B か し 段な な なり 必

闘争方法

が わ

\$ n

さわ

しく

な

<

時期

はずれ

現在の情況下では、

ح

在の任務 命勢力を打ち砕いてしまう うのである。テロは、最も活動的な 闘士を現 から引き離し、支配者勢力ではなく、 だろう≫

(3)現代日本思想大系3『超国家主義』所収

(4) バタ 1 ユの用語

犠牲者 まり、 沈黙の中で不安を精神が感得するところのものは から、 存在の連続性なのである。暴力的な死という事実 とは 分ち持つのだ。この要素とそ、宗教史家とともに の死に注意を注ぐ人たちの前に明らかにされる、 神聖と名づけることが出来るものであろう。神聖 るい て明らかにされ なわれる。 の方法で、 ≪犠牲に まさに、壮厳な儀式において、 は犠牲の対象が生きものでなけれ 存続するところのもの、水を打ったような がそとに送り返された存在の連続性なの 存在の非連続性の解消が導き出される。 たおいては そして犠牲者が死ぬと、この死によっ との対象を破壊するということ) が行 た一つの要素を参加者がそれぞれ (中略)犠牲者を殺 非連続の存続 ば、何らか すとと(あ 0

(5)内村剛介『わが思念をさらぬもの』

(次号完結

十二月号を見て 主として塩氏論文関係のことし

ヤマモト・ア

なリバー 雑文欄が適当だ。 表するジ と銘打つ同誌の巻頭に持ってくる文章ではない。まじめ スト リベル 青井君の の寝言だろう。〃終着駅』に集り青年の一部 + タリアンのアンソロジーでもない。いまのダダ ズ的な若人の独白なら「若人の声」あ 「心からの行動を」は『無政府主義の機開 N 0 12 月号を見て、感ずることの二つ三つ たり を代

1

を得ていないのではない からくるものにのみ重点をおいては、史論としては正鵠 ズムの運動を、『階級斗争』をめぐっての理論的 拠って、サンジカリズムを擁護する側にあったことは確 史論の曲折』としては問題がある。塩君らは「黒線」に の成立と、昭和八年までの果敢なアナルコ・サンシカ かだ。が昭和二年以来の全国自連の分裂、 塩氏の「サンジカリズ か ム紛争」について『アナキズム ? その後の自協 な相 IJ

君は岩佐老人の『山賊の山分け論』と八太氏の「階級斗 より大きな分裂の要因であったと見ることができる。塩 あれは掠屋と労働者側の生活態度の相違からくる方が

ところはそうなのである。 ては惨酷な視点かも知れないが、現実の歴史の証明する であるが、大杉以来の労働運動(日本の)の伝統 争説の誤謬」がアナ系の労働運動を分裂させたというの (戦后のアナキストの中にはこれが大部分だが)にとっ のではない。こういら見方はいわゆるイデオロ 八太両氏の言説で分裂したり衰退するほどに底 の浅い が岩佐 + スト

要因がアナキズムやサンジカリズムの活動展開に客観的 ったのである。だから自連が分裂しなくてもアナ系の労 T 抗の防衛上各国の労働運動に財政的、精神的な工作をし T 組合は同じ不利な客観条件下にあったのであろう。 不利な条件になったから、労働運動の主流は政党的な いた よる中産階級的革命がロシアに 5 アナーキズムの昭和に 党の堕落の経験を経ていなかったこと、これらの諸 た こと、日本においてはそれまで英仏のような労働 とみられたこと、それ 我・プロ レタリア独裁のポルの方向に味方して おける衰退は、とも角 がソ連邦の資本主義 おいて、一応は V との対 成功し 1 ニン 5

にどらいら影響と役割を演じたか? では岩佐、八太の両氏の言説はアナ系のその後の運動 観念アナキストに悪用されたにすぎない。 それ は、 掠屋 の集

当時純正アナを誇称した思想団体、 何々社というも 0

> である。 ゆすることは、正当な権利であるというグレンタイ論理 労働することは搾取されることである。資本家、企業を 金を出して引き下ってもらう掠屋の生態を許してい 言ってくるものには広告料とか、ワラジ銭とか幾らかの 的生活態度を自己弁護するのに都合がよかったのである である。この連中にとっては、岩佐老の山賊山分け論、 あの種の不祥事件を起とさせないために、官権も資本家 も、主義者に対して懐柔政策をとった。なんとか文句を な夾雑分子を多数に包含していた。難波大助事件後は、 たアウトロー的なグループであって、壮士的不良少年的 とか主義の内容よりも、より叛逆的ヒロイズムに駆られ 盟の中心勢力は、大正12年の震災後、その主唱した思想 は東京だけではなく各地にあった。が東京の黒色青年連 太氏のマルクス主義的階級斗争批判が、 そのグレン隊 た 0

農の反体制、 帰った古い主義者だけに、マルクス的な都市プロ アだけの革命の神話には我慢がならなかった。都市 覚者であり、そこでアナーキズムの思想的洗礼を受けて 才だったから、東京に遊学し、アメリカまで浪々した先 岩佐老は、千葉の農村地主の二男坊であり、郷 織プロレタリアだけが革命の担い手ではない。貧 革命性をマルキスト とは違って重視 党の秀 V · タリ T

掠屋 手段を持 佐氏 合 の精神 た 5 る。 のであ 岩佐老は貧農革命論は主張 たない 的 文筆によって を拠り る は 反撥 拠り所としてカリスマに祭り一生涯寄生的な生活様式であ 労働運 的であった。そ 動を蔑 も、労働によ 視したの L しな って て労組 しではない か り上 8 2 た った 自分 Ш げ 賊 ことが 、労働 の生 5 が 論を n た 強

使さ 観を批判 本意 その帝 5 熱心だっ あ to 0 で ので として、労 太氏は牧師上りだ。その反 たに過ぎない。 T n なかったはずである。工場労働者の運 玉 に八八 主義 はな するのは当然であるが、だから 5 た。 る工場労働者の反逆斗争に 派屋連が 太氏がより重点を置くか 的な矛盾を露呈してきて 5 マルクス的 か 働運動より 八太氏の反都市的 太氏系の連中はだから な階級斗 も、農村運動に希望を 7 N 争と + な性向 な、戦 水を いた資 v ズ ES 弁証 カン 4 いって、漸 进法的 略上 かける 農民 はアナ 動、農民運 本主義に虐 を自己弁 一の問題 かけり ح 運 物史 動に ٤ は < てキ

労働 2 ったか? 当時印刷工はせ東京印刷工組合が自身 n 者と肌合が違って た最高給とりで、職人ギルド的な色彩が強 は連 いたのである。 の分裂後は観念アナ 一般労働者 からは 文 化的 労 7 働 0

> だから \$ に落ち込んだことは、現象的に スト 別個のも + して絶望的無政府共産党事件のような、観念理論の (掠屋 屋の中間階級性 ら黒連 ズム で P きる ナ ス が相沢や植村のように、その中で 自連に であろうと、マルキシズムであろうと ーキの原点からの背叛であったのである。ア でない)分子が、昭和七年後 難いのである。 ので と考えること、そのことがおこ ゴロと文芸詩人グルー 的掠屋の好餌に とか 0 ある。 巣喰 、工場管理 である。虐げら った学生上り 1 デオ 社 ヘロギスト なった。 会主義に一番早く染った とかの考え方には のように産業 は、部 れ や、文芸派的イデ プに三分化して行 たる民 その後黒連 VC のファ な 分的 る要素が強 衆の が まし ショ 一較的マ VC 革命 同情 的斗 理論で革 50 期 \$ VC で V 才 から 0 士 5 ナー とは 陥穽 メロなギ ŧ 遭 た。 そ 識 会 命 T 遇 右

した ナ 01 論争、 ったことには相違が IV *-*戦線の中 やはり実践運動 デ オロ 或い サンジカ は観念アナ対労働組合派 でも、 1 パリズム の問題ととらえざるを得な 塩君 な からは遊離し らの 5 にクロポト だから昭和初期のア 一派は、これ たイデオ + でを得ない気持に がの分裂現象を戦 ン的 とは な ロギ 理 解 違 ナ、 を示 スト

だとみるのは自協側にいた僕らのいまの見方である。話の功罪をあのようにあげつらうととについては、過酷は同情できても、だからといって、岩佐・八太両氏の説

深川、 掲げて 原因と その生活態度の自己弁護か ら江東自 る暴力沙汰に及んで、反政党新聞の山 かった 的 であ 意 0 勃興期 八太の る 5 2 東の労働者 ので、そのイデオ 橋場の労働者らは、この両氏とは直接の接触 いたのである。自連系の 義に共鳴して、自協に拠 僕は二〇才過ぎたばか うより T 価 753 しては岩佐・八 由の幾多の有能な斗士をポ か、あれか 5 1 言説に 3 る雅量をも に、大杉、ク 方、 も、黒連の働か 戦線で、黒旗に踏 そ ら五 は勿論反発 n 太両先 ロギー を 〇年・半世紀を経 つのが先覚者に対 55. あの ロポ んって本 頃 輩に対して 江東の労働戦線派に対す ざる寄生的 的なものの対立が を感じて 観念アナ F 9 の情勢下におい + の青年と み留ったのが IV V 戦線に追 所 流の 本忠平(勘 5 が 、深川に黒旗を て、ア な暴れ た。 かつぎ サ L する一つの礼 その ンジ てあ から 5 ナキズ 助)君 分裂 本所 あげた 革命 6 0 T P 力 再 東自 、ったい 坊が は の革 な 0

を送った千葉、長南在の棚毛を訪れてみたとき』岩佐老ことに昨年の九月、岩佐老の出生地であり、その晩年

T

知

2

T

5

3

か

でどう

の問題

では

な

50

反発 かとい 識によってポル 観念ア ともに 合はあるが、型 組合が協調的 n 主義では労働者の真 であり、 ラー 育成 塩君 た。 Ó 5 な革 とし ままでは されて その指 戦后の労働組 、また ナによ **うことなら、圧倒的に政** も包含する企業内組合である。 0 た。 命 文章 たマ P 的 都 に近 プロ である ナ 導 か Ó b 5 重大な問題である 0 IV 市 気の毒だと思っ 主としては る労働者は漸次増加して 層に 的であるか った 一節 てカ クス プロ ルコ・サン んだっ 50 レタリア にアナ系が か戦斗的 の解放 合は企業の一構成 VC リスマに仕 的 0 V だから、 か? 「さて戦后何故 タリアに 革命神話 一様に どとの خ などあり得な が少く、ま アナ的である ジカリズムを知識と であるか た。八 5 n いら感 ホワイ 党主義者が多くて、反政るか、その影響力はどう 7 は何人 非ざる ルクス 立 に対する批 か、その影 てら 八太氏は加 労働組 ば、 部分で れたに は革命的 VC 7 L 1 うのを見て B 流の革命神話に 5 気に アナ 5 てアナ系を名乗 かの表向きの色 カラーもブ る。それ 組 判が ことを体 合の能 合幹部 かか 系 す た。老 ある。その 会 ぎな 非生 労 て、思 驚か る 働 あ 動的 N 組 験 0 は 問 5 b 人 ア的 1 意 3 題合

P 働組 L な 革新 が る 総評系 ナ・ボ 5 な 5 だろうと T n な 合 時 限 5 を名乗る泥棒指 代 5 \$ ح 5 3 な ح G 評系で なけれ らな IV か 錯 2 ح 僚に N 論争当時の の差 誤の を は期 とは サ P第 を前提とし カン > 5 特で さえも は 生はあっ ジカ 歎きである。 ح 望ま 一主義のア つととその b ボ きる 導 P を基点に自 断じ 革命的労働組 ル系労働組 ても、五〇年前 者 5 ナ 50 なけ 0 左 0 て革命的 意 5 協調的 ことが、 n メリカ支配下 0 から まの時点で革 た ば 治 重 労 0 ならな まに 合 理解 ソ か戦斗的 労働組 も存在 合論といっ サ 組 0 1 0 1 合 成 ように 5 果を は中 デ 工 の日 合 L 才 命 1 6 7 な か 的 0 横取 多 本に たも • ギス \$ 5 P 労 方 階 0 ナ な 日 働 向 級 VC 6 は存 のは 系 労 < 盟 組 が 1 を さ 的 侵 現 系 5 合 辿 れた 透 な

とし 態で た うであるか 0 ては多数決原理のブル 方が あるという 組 下 合よりは、三里塚、富士、 は、組 から P 0 自 いである。が、 合は管理形態であ 1 連 + ズム 合 2 の原理 8 一労働 P 議 塩君が 運 から 会 動 水俁等 り住民 貫 から きや 民 主

> 5 中 す 80 はア 0 デ 連 3 b VC 央集権原 争 0 で x 戻す 0 が 結 た 酷使され の戦法だけで事足りるであろうか ナ 中 ロギ 自 80 鎖に す 史 見る 観に 3 1 化止 治 るア VC 労 で + 理に 動自治 ならば、 管 つなが 理 1 るか止らない とし ナ 階級 ならば T IV 則 であり、 を目指す トとい 5 3 て過去 ٦ . とるか 的斗争 れた 0 ٤ か るととを廃棄し、 拠 ? ために、上からの権力的 7 サ ルクス プロレ 2 5 うのは、いっ 0 限り、 ンジカ をす な 観的 かに アナ あ 働運動 5 は認識 る。そ とに拘ら < 主義的労働 タリアの VC か まで 2 かに色分けさ は黒旗 カン ・キス n 0 不足も甚だ わ はア 管 \$ の組織原理 5 1 下か 理権を ず、 5 ず、 の経 ナ VC 放 を、 価値説、弁 どの方面 色分 N 5 企業利 を目 2 験的 コで れる の自 しと 管 Ē it 0 7 理 5 げ 3 戦 あ で 治 して、 を廃 0 潤 す 5 VC 5 n 放 術 あ 4 手に 証法 0 向 n る斗 論 3 争 滅 た 級

る。 とみる ととに日本株式会社形態に於 まの のは誤 力 日 本で の支配下に の方が権 は労働 5 であ 3 運 力の犠牲者 あるほど山 50 動 0 5 みが 幸 であ 5 賊 0 革 7 労働 0 命 る。 は、 山 的 分 組 工 け的 P 中 合 木 ナ 小 は N そ 存 1 企 ギ 在れ

目 T 権のた B 初 0 . 標 的 阿賀 T T が な 5 な à 生命の る 7 80 の核戦 力 5 東北 III され のである。 の市民斗争の方 の三核保 る ·四日市 to って 原点斗争だ . るとき、 の本 n 海 持 はみ 国の 道 0 0 Ш 三里塚、富士の生存権 5 能 な企業 が国家 から 共存的 る、そ 7 的 崎の公害斗 な反射 V からの I F. 和潤 権力 b ナ な n れ合 反対 深 から の分配 × .. との 1 争 刻な革命性を 5 . 各 建 工 で 5 直 設 VC F ネ あ る。 I 接 地 反 1 ナ N b の対 対 A ギ 0 斗 0 8 原発反 T 和 と、生 争 決と 水 0 斗 戦 から . ٤ 争 革

で ス 2 VC ある 和 か 力 0 な 5 初 と称 リ た展開 期 T たととか か ズ T で踏 する のアナ のアナ 2 た 0 な 5 分裂に IJ 5 4 中間 観念理論屋 5 らくる解放 系運動の衰退の ことは、 も、そ 4 階級 5 20 + あっ VC T 9 ズ つい 4 ح 大 的 八衆の たと見る とで の見方 n 5 1 0 れだけ 思想 エオ T 幸 デオ 中 5 0 あ 力である。 に生きる 主因が、 では革 ロギス 的 る。 カン 自 N 称日 ギー のは、 混 2 理 迷 命 論 本 0 ٢ n 実践運 そ 純正 労働組 のエ 0 消 2 は から これはアナ 失し VC P 5 ネル + 自分 to 5 P だ た ح 動 + 合 観念 とか 自身 観念 # 一の機 を VC + Ł 身 ス 1 +

> \$ として、 懐古的 な 命 革 理 論と 命 理論 して デ P 1 V ナ 2 1 9 + 1 ズ ムを r VC す サ ぎ な > で 5 \$ T

T 0 T \$ な 陣営に 5 知 かなけ を な をもの 5 5 たも れ 5 ば か が ならな 0 5 2 K として れは す る い問 反 ح 充 歴史の一面を正 T 対 VC 一度は VC 題だからであ 0 塩君 失礼 当時の 0 6 努力 心 す意 3 サ \$ 2 と情 とな 2 L 熱 で カ て、 5 に対 ع IJ ح 摘 ズ 4

去の 六〇年 学者 の機 T は 0 ・ア た 東京 か 5 会が代 カン 后 た にことが最 思 のア 5 VC \$ 史 を掘 想家 ろい 労働組 + 知れ きて H 0 ・ズム軌跡 アナキ ナ達の主流 復権 のア な り起 3 P 詩 大の原因 の条件 3 5 合 絶縁 + 0 ナ ズ 人上 は、こうい 内 が 0 4 部 1 た 3 なぞら これはあく ことは キズム の復権 b が VC + を 00 アナ n ではあるまい あげることは なぜアナキ て、 が、 とつな そ の書 う過去のアナ 関係の文献 系イデオロギス 5 であ n ジャ à, 幸 は でも 2 2 ズム るも て、現 n か できる 紹 1 ア 過去 ナ の影響 で から 介 0 ーっ 出 IJ 0 者 が 市 キズ 0 代 0 ズ + 1 . ーキズ は 0 P 0 0 4 研 から に登場 て、過 H ナ 成 稀薄 な 究 2 果だ 5 本 系 家 n A VC n 左

は、この n る。 なか を有機的 づ ま 0 H まで日 中に るも 0 大学キ 現 た 3 VC 在 カン n 本に 0 では 連 の各層に で 結することができないか あ ま カン T さん なく って 戦斗 3 ス な 力強く漲 爆発寸前に な て、なぜ かった 1 戦后 ンポリの反権 0 ってきたア 日本のアナー P ほどの規模と力強さで蓄 反 ナ系労 あるととが が問題 力・反 ナ 組 年運 、我 1 + 合 ズム運 なの が + セクト なっを勇 1 育 0 の潮 成 で 中 動 VC あ さ

T で は P ナ 生き 部 キス 0 た人民集団 中 1 であ 産 階級イ を動 ンテ IV + IJ カン ス す 層を 1 であ ととはでき 引 かきつける な こととが 50 0 観念論理 6 ŧ

すぎず、 ない。 5 「自分達 系 理 小は実践 論体系の構築を誇るの の理論は、自分達 で あ 0 T 理論は 達の実践への は、 ただの 実は本末転倒 媒介物 ハバネ 0 ーつに に過 で

2 とれ 10 から VC はア は朝日 宿 9 良 心心的 ナー 的 た ₩ * 欲 まら 日 求 な + 本のア ズム ن ح から 一哲学者が とナ 展 一と銘打 開され ラーエ月 ナ T た " + 四日号の ない いる。なぜ当 無意識のうちに 也 1 はただ労働組 が、 中 0 久野収氏の「神は 病 あ める る 代 言 合だけ 日本 P 日 葉 本の ナ である 1 0 現 IJ +

> 文献 盆裁 ح の断絶 いいし の万 5 巻の紹介 0 っと広く深刻 っに堕して を も、歴史の掘り起し 埋めるも しまう危険性があ な人民斗争と結びつか のでなければ、 りはし \$ 全 P ま < ナ 左 5 有 か 閑 + 0 人 ズム か 0

無礼な N 度の殴り テー これは ムリベル N 込みを受けて立つだけの勇気がなけ た も日本のアナー しかに大胆で無遠慮な、ある意味では乱暴・ テー ルの十二月号の キズムも枯死してし 読後感だ。だ ま n うの から ば 5 で IJ 0 ~ 程

(74・1・13・六本木の庵主)

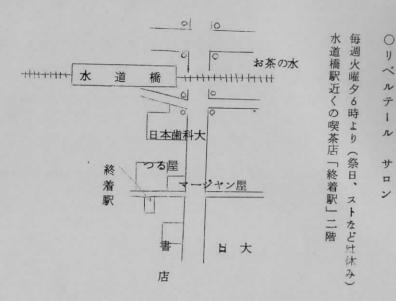
黒旗の下に」

合組 革と の結 0 合自 記述されている。読者は最近の『イ VC 発行所ができ、当所からパンフの第 b 今度、 成と分裂、「反政党新聞 織の実情「全国労働組合自由連合会」 (大正十五 が との自協がイニシ 歴史』と題して、 由連合協議会」 自協史ー江西一三著>が創 啓衆ピル いてい 4 F る<江西一三伝> 論者は大正十 (全国 ャチブを執っ を根拠地と 自協) 」活動を通じて「全国労働 刊された。 0 た各争議の経過報告 一年頃から て、 創 と併読すれ オムミる号4号に 一輯<黒旗 立へと進展 // 0 自 0 ば の下に 協 下 労 働 の沿 Ļ VC 組 年

闘 抜 T な 5 VC た人び 加 5 6 た部 ある して、黒旗の下に結集 との記録とし + 分 であ ろう。なお 5. 国内 るとの種 て貴重であ 人 VC ファ し、兎角、 テロ ァシ ズムが る。 イムが社会 体を張 選 0 実 2 施 的 0 雰 所 T 等

実践を の六頁 VC と規定され、自 る。との「黒旗の下に」では彼等は観念論的ア 三の でも 動史例 たい 0 として考慮検 称充 て そうだが、自 用 理解しようとせ では か。先づ第 本アナキ えば萩原晋 P んたとされ ナキ 5 級 するところとさえなり、漸く たずらに大言壮語する自己陶酔 から 7 闘争への侮蔑的否定は労働組合運動の苦し 真 ズ ズム運 うした VC 意は先年タナト 八 協派は実践派 討 ム運 詳 VC る純正無政府主義への 太郎著<アナ すべき点が 連と自協の確執 b 0 動 岩佐老の 動を の一環 サ ず、たゞ文章上に 労働組合に対 ンジ L 力論 伍 て再び混乱に落し入れ とされてい ある。それ Ł 労働組合山 N 7. Ī ス社が発行した ではあ てみる コ・サ マラテスタ として、岩佐老八 する認識不足、日 、その組 おいて、 る!!!果 0 る。 ンジカ は是れ ならば 反感と否定 0 一織時 0 論は俗耳 事 路線に 実、本 ナキス ٨ L P IJ 4 幸 演説会 アナ てそ 代 ナ ズ で 後 太舟 + であ た VC 0 0 4 入 書 5 ス F V 運

条件に た。ま る生活 人的テ 己陶酔 ぎな 佐老は た労働 0 ナ 5 = 階級は 8 主義 ルコ・ れを級 オン 闘争が 分類 担 5 衰退の 還元は に満足 たサ へのコ 大正八 本的組合の実情を階級と級に分けて(老によれ ス 0 0 2 とは何であ 者 V 9 なく、その てい VC たろ ~0 闘争の 合のまんえん、フ E の意 8 タテ テの階級分類ー資本家と労働者の例 ッンジカ**に** " す 2 Ü できな できず、 50 'n 要因は単に岩佐 た。あ 傾斜 . 識そのものが資本家の走狗 プにみられ 用したと考えなけ 系のみを問 一年生の級は場所を異に プレ 九年 ば カ 存 P 在 2 リズムに疑問と消極性を提示したに過 いが たろう る 対 IJ ナ 老を の要素、ボ " 頃 運動の 労農 クス 1 \$ するアナの部分は所謂労働者 + から北風会がこの趣旨 ク 、ととでの 利 丰 混 るように排他的 ンソヴ 7 等を廃棄す の英雄主義、その 用 同す スト運動内でのサンジカか。推定によればリャク にして、ヨ シズ . 消 L 八 っるなと指 n 1 た一群 IV 長 ムの台 エッ ば 太 をす V な の卓説 アナ ŀ る意味あ のアナキ 5 ヴ 一コ系に ~ な 頭等が相乗的 1 IV T て存在 を理想とす 摘し なのを衝 キの に帰 そ 5 コ 代 裏返し 弁に . 0 1を説 T 向 世 サ 時 スト 5 5 0 す 5 2 代 が ð. る。 2 T ははヨ 堕 3 VC は個 n Ü 0 る 0 Ł 0 ち あ 意 白 あ テ 自 ア岩 2 李 二



リベルテール 一部 100円

Le Libertaire

毎月一回15日発行

1974年4月15日発行

Vo. V No 5

編集兼発行者

発 行 所

東京都練馬区大泉学園町2190

萩原晋太郎方

リベルテールの会

(振替東京 133830番 三浦 精一)

になる。 復讐と T た 2 2 ア らさず 0 7 力 会 は ナー 直 は を活用するのは自然であるべきで、 と思う。 主義または ように 接行 か示 の直接行 自らの主義 た時を なけ す キス 「労働運 たゞこの るア 動で 威行 幸 とれを観念論的ア ŀ ٤ 始点 ば自 動だ 運 あ 動 無政府 す 50 動 った。 時 動 主張の活動範囲を狭ば n 水 するも 観 + けが正当化される。各 で避け 更に 代の ごで ば ズム 念論ア を忘れた 共産主 当時以来、 は屈折した心情のあらわれと テ 0 のだが、ア VC 人性のイ ロはそう 府主義は人 られ 大杉の活動さえ軽視 米国の ら日本の社 ナー 於 一義(ク 怪物が て、 ナー な 付さ キズ 主義者 5 自己主張に + 一断面 ニシ ロポ L が氾濫する n A スト た運 かあ 0 とれ + める結果しか の人び F + ・と規定す 人の十 である チブを重視す 動 キン を否 が ح 謙 禁圧され けると 2 主 0 木 V 虚さが す 全 0 義) 定 が 大勢 ス な発 れ江西 江 サ てん L ŀ. ば 左 ī ٤ \$ た y べけしそ

ない。は犬小舎 と犬小舎の 含 与として把え、 との詭弁に欠けて 0 は命 (理想) としてア 聖人もい 思想は を起す ようとしないことで (社会政 理 関係 想とし るが である 盲人が 策) ナ いる ては 矯激 な よい にともる。 + U ある。 象 のは何か ズム は 森 を撫ぜる式に扱 の徒が輩 が革命を 戸 を認め ・クロ キエル らと過激な手段 時折遠吠えす ? る ポ 5 認 する。 ゴー P 1 80 は理想 5 るの + 5 ナ V N は 0 即 + でよく U 世界精力 だ るに 1 ズ ポト 4 か 自 主 過 Ė VC を な + 分 神 生所い 殿 VK 革 な

0

れは今後における私達の指標になるだろう。江西さんが率直に闘ってきた経過を報告され ば 旗の 験から る だ のだ。 ろう。 いつまでも闇夜 下 学ば NC II 世間 啓衆ピル ないが 発行所東京・ 的 K は経験から学ば だ の中で声をかけ 4 からと言って経験を蓄積し F (はしも 文京区 実費 後楽217. 送料 ない あう間 され 共三〇 0 は 柄 人 3 1 3 馬鹿 は しか結 な 5 必 ٤ な す

n 5

も経 n

-20 -